

ヒトーパデーシャ

第四部「平和」

陶工屋に入ったバラモン

「陛下、まだ手に入らない内から、喜ばしくそれを当てにして次から次へと計画を立てる者は壺を壊したバラモンのように恥辱を受けるのです」とデューラダーシンが笑って言う。

「それ何故に」と王が訊す。大臣が語る。

「デヴィコッタという村にはデヴァシャーマンというバラモンがいた。秋分の祭で馳走の入った壺をもらった。残暑を凌ぐとそれを持って陶工屋に入りその片隅で寝る。壺が盗まれまいと棍棒を片手にこのように想像した。『ご馳走の入ったこの壺を売れば貝殻が十個もらえる。そしてその貝殻で檳榔子^{びんろうじ}やら着物やら買ったたり売ったりすれば十万倍も儲けられる。それで嫁を四人ももらって、もっとも若くて美しい嫁をやたらに可愛がるぞ。もし嫉妬で喧嘩になったら、怒って他を棍棒で叩く。』と言い出したらその勢いで棍棒を放して、ご馳走の入った壺も陶工屋の壺も数々壊してしまった。騒ぎを聞き戻ってきてこの有様を見た陶工が、バラモンを叱って追い出した。これが『まだ手に入らない内から』云々と、私が申し上げる所以でございます。」

その後、禿鷲が王にこっそりと話し掛ける。「覚えるが良い。酔い痴れたる象のごとく道を誤りし傲慢なる君主は叱責を受けん。」

出典 *The Second, Third, and Fourth Books of the Hitopadeśa*, Max Müller, ed., London, 1865. (英語から重訳)

一 獲らぬ狸の皮算用。

二 浄行と訳す。インドの四種姓^{ヴァルナ}制中の最高位である僧侶・祭司階級。梵天の裔で、その口から出たものとされ、もっぱら祭祀・教法をつかさどり、他の三姓の尊敬を受けた。〔広辞苑〕

三 檳榔樹の果実。檳榔樹とはヤシ科の常緑高木。インドネシア・マレー地方の原産。熱帯アジアや南太平洋諸島に広く栽培。幹は直立し、円柱形で環紋があり、高さ十〜二十五メートル。幹頂に濃緑色の大羽状複葉を集める。肉穂にくいさい花序に単性花を開く。芽は食用。果実は鶏卵大で、キンマの葉に包んで噛み嗜好品とする。薬用・染料。〔広辞苑〕